

“知るも知らぬも”川は流れる

岐阜分室 次長 石川 高史

木曾三川分流、デ・レイケ

明治政府による木曾・長良・揖斐の木曾三川分流工事は、今から丁度100年前、明治33年に完成した。三川分流を骨子とする木曾川の改修計画は、明治政府が招聘したオランダ人技師デ・レイケによって策定されたものであり、デ・レイケは知る人ぞ知る「日本の治水の恩人」である。

現在、この地方で生を受けている人々にとって、木曾三川分流工事の完成は過去の多くの出来事の一つに過ぎず、デ・レイケの名や三川分流の事実など知らない人の方が多いに違いない。

かくいう小生もこの地方で河川にかかわる仕事に携わらなかったら、木曾川も長良川も揖斐川も、昔から別々で今のような川と思っていたに違いない。そして、デ・レイケ！Who？というところだろう。

岐阜長良川球場

岐阜分室のある岐阜県岐阜総合庁舎から歩いて5分もすれば長良川のほとり(左岸)に出る。この付近の長良川の堤防は特殊堤構造になっている。川表の練積玉石張りは年月を経て黒ずみ、周辺の景観に溶け込んでいるように見える。もっとも、川表の堤防下から見上げるとミニ「万里の長城」と言えなくもない。

この辺りの改修工事は、昭和に入ってから木曾川上流改修(長良川)として実施されたものである。家屋が連担し堤防拡築が困難な左岸側は特殊堤とし、長良川本川は右岸側に川幅を広げられたほか、長良橋(鶏飼はこの橋より上流で行なわれる。)右岸下流付近から分派していた古川、古々川が締め切られた。現在、Jリーガーやプロ野球選手が活躍する岐阜長良川球場は、まさに往時の川の中なのである。この改修工事は歴史的にやや新しいので、少しは知られているだろうが、そのことを知るまでは小生も昔から長良川は今のようであり、球場は新しいから別として、かつてそこが川だったとは知る由もなかった。



締切堤工事以前の長良川

(写真向かって左より古々川・古川・現河川・昭和14年竣工)



金華山上空からみた現在の長良川

(平成3年3月撮影)

出典：木曾三川治水百年のあゆみ(建設省中部地方建設局)

“これは川ではない、滝だ”

あるとき、先に述べたデ・レイケの研究の第一人者である上林好之氏の講演を拝聴する機会があった。デ・レイケが北陸の川の現地調査をした折に発したとされているのが、標記の言葉である。河川の技術者なら大方ご存知、というよりも、そのように思い込んでおられるのではなかろうか。上林氏の研究によると、これは事実と違うらしい。デ・レイケはそんなことは言っていないという。当時の地方の役人が予算獲得のための調書が何かにデ・レイケを巧みに利用した形跡があり、これがデ・レイケ発言の通説となったのではないかという。

小生も一つ覚えのように思い込んでいたのだが、この説が事実なら、このお役人に“お主やるのう”。

御囲堤

現愛知県犬山市から弥富町に至る木曾川左岸の大堤防で、美濃国(現岐阜県)側の堤防より3尺高く築造されたと言われている。慶長^{注1}13年から14年にかけて、家康に命じられて伊奈備前守が築いたのが通説で言う「御囲堤」であり、岐阜県治水史もこの説をとっている。

安藤萬壽男氏(愛知大学・愛知産業大学名誉教授)の研究によると、この説は肯定できないようである。木曾川左岸から流れ出る各々の枝川を締め切り、連続堤が築造されたことは史料等から確かなようだが、“備前守によって築かれた当時の御囲堤は、水害復旧の応急的性格をも含めた規模であったのではなかろうか”とされ、“岐阜県治水史が巨大な堤防断面図を示しつつ、いかにも金城鉄壁の堤防が伊奈備前によって構築されたかのような印象を一般人に与え”と警鐘されている(「江戸時代、木曾川における堤防強化策としてのスーパー堤防に関する調査・研究(財)リパーフロント整備センター」)。

美濃国側の堤防より3尺高くといわれる点も、後世説(それは寛政^{注2}頃からの不文律であったという説もある。「岐阜県の地名 郷土歴史大辞典 平凡社(1989)」)があるように明確ではない。

川は人との関わりを全て包み込んで今日も流れている。

注1：慶長年間(1596～1614) 注2：寛政年間(1789～1800)